

# 第二章 闘魂の記録

# 闘魂の記録 一九五二～二〇〇四年

## 柔道部小川町道場

創部百年をひかえた平成十五（二〇〇三）年十二月、柔道部は道場を移転した。実に四十七年ぶりのことである。新道場は大学十号館に設置された。

昭和三十一（一九五六）年の夏、当時の部員たちは、畳を担いで今は懐かしい記念館の地下道場から、小川町校舎五階に新設された道場への階段を登ったものである。

爾来、約半世紀、柔道の国際化が進むなか明治大学小川町道場は、学生、OB相俟って数々の歴史を築いてきた。

この道場は、フランス柔道連盟理事で、ヨーロッパ柔道界の重鎮、F・ベソン氏をして世界一の道場といわしめた。これは単なる外交辞令ではなく、単一柔道場としての競技実績を評価したものである。補足すれば世界で最も多くのオリンピック、および世界選手権大会のチャンピオンを輩出している道場ということである。

もちろん国内の主要大会、たとえば全日本柔道選手権大会、全日本学生柔道優勝大会などの優勝回数においても他道場のそれを圧している。

そしていま、地下柔道場から小川町道場と守られてきた伝統が、大学十号館の新道場に受け継がれているのである。

## 黄金時代 低迷からの復活

昭和二十六（一九五二）年十月、戦後初の全日本学生柔道選手権大会（個人戦）が開催されて、明大主将金子泰がこの記念すべき大会を制した。大会が行われたのは大阪球場に特設された屋外試合場だったがプロ野球の試合と間違えうほどの大観衆を呼んだという。

当時の大衆が文化的娯楽を渴望していたであろう事は想像がつくが、以後、年毎に人気を高めていった学生柔道の流れを見ると、この大会と翌年から始まった団体優勝大会は柔道の持つ競技としての面白さを大きくアピールしたものであったと思う。のち、東京に会場が移されるや、国技館、東京体育館を満員にしたものである。

学生柔道の盛況は以後、二十数年続くが、この間、明治はいつも主役の座にいた。

しかし、この盛況も昭和四十年代後半から徐々に下向きとなる。これは柔道の人気が特に落ちたという事ではなく、経済の好調に伴うプロ、アマスポーツ界の活況をとらえたテレビ各社がスポーツ番組の放映に積極的に乗り出したため、人びとの関心がいろいろなスポーツに広がったからだと判断している。

この学生柔道の人気下向と軌を合せたように、戦後、黄金時代を誇った明大柔道部の低迷が始まったのは皮肉なことであった。

全日本学生優勝大会では、昭和四十六年、四十七年の連覇以後、平成三（一九九二）年の四十回大会で奪還するまで実に十八年間優勝旗に見離された。この時代の苦難の歩みについては記録の別項を参照されたい。

平成三年秋、明大柔道部は遂に優勝旗を駿河台に持ち帰った。この結果は柔道部の復活を信ずる現場と明柔会の執念以外の何ものでもないのだが、低迷時に柔道部長に就かれ情熱的に部員の指導にあたった百瀬恵夫教授の尽力



数々の歴史を築いた小川町道場（五階）



師範 三船 久蔵  
(1913~1957)



師範 姿 節雄  
(1951~1999)

も忘れてはなるまい。  
柔道部は戦前、戦後を通じて多くの良き指導者を得たが、象徴的な存在は、学生柔道復活以来、部の師範として、また明柔会会長として学生、OBを指導して来られた姿節雄先生である。先生は先年、病を得て亡くなられたが、病床にある時、吉田監督以下選手たちが前日獲得した十五回目の優勝旗を手にお見舞い出来たことが、我々にとってせめてもの慰みであった。

### 師範と監督（戦後）

戦後の、明柔の師範は、三船久蔵（在任大正二から昭和三十二年）、姿節雄（昭和二十六年から平成十一年）の両先生で、三船師範は、戦後は名誉師範に就任していた。

監督は、戦後の明柔クラブ時代の古賀愛人監督の後、昭和二十六（一九五一年）年から昭和三十七年まで、葉山三郎先生が十二年間在任し、姿師範とともに、戦後の明柔の黄金時代を指導された。

以下に、戦後の師範、監督の名を掲げておく。

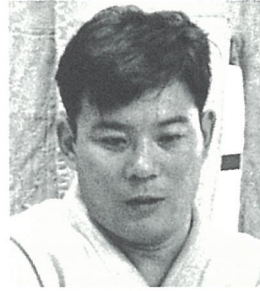
（文責・小林敏邦）



古賀 愛人  
(1948~1951) 明柔クラブ



3代 神永 昭夫  
(1967~1973)



2代 曾根 康治  
(1962~1967)



初代 葉山 三郎  
(1951~1962)



7代 上村 春樹  
(1984~1990)



6代 篠巻 政利  
(1981~1984)



5代 関 勝治  
(1976~1981)



4代 神田 和夫  
(1973~1976)



9代 重松 裕之  
(1993~1997)



8代 原 吉実  
(1990~1993)



昭和26(1951)年、葉山監督就任当時の柔道部員。  
後列中央が主将金子泰興



11代 秀島 大介  
(2000~ )



10代 吉田 秀彦  
(1997~2000)

## 第3回全日本学生柔道選手権大会

10月15日 大阪球場特設道場

学生柔道再開

明大金子泰興の覇者に



金子泰興

占領軍による学校柔道禁止令が解け、新しく結成された全日本学生柔道連盟による戦後最初の学生大会が開催された。(参加二十六校)

本大会の第一回は昭和十五年に行われたが第二回大会は、戦乱のため中止となっている。この大会に於ける明大勢の力は圧倒的で、優勝は主将金子泰興に輝いた。

〔準々決勝〕

- 大野忠博 ○—門屋賢伍 (明大)
- 廣川彰恩 ○—曾根康治 (明大)

〔準決勝〕

- 大野忠博 ○—廣川彰恩 (明大)
- 金子泰興 ○—末木 茂 (明大)



大阪球場に勢ぞろいした明大チーム

〔決勝戦〕

- 金子泰興 ○—大野忠博 (明大)

全日本選手権大会出場者

姿節雄、山肩敏美

# 闘魂の記録 1952 (昭和27) 年

## 第1回全日本学生柔道優勝大会

9月14日 蔵前国技館

### 優勝! 明治大学

第一回全日本学生柔道優勝大会は九月十四日満員の蔵前国技館において十六校が出場して行われ明治大学が圧倒的な強さで初優勝を飾った。

#### 〔準決勝〕

日本大学 5-0 早稲田大学  
明治大学 4-0 中央大学

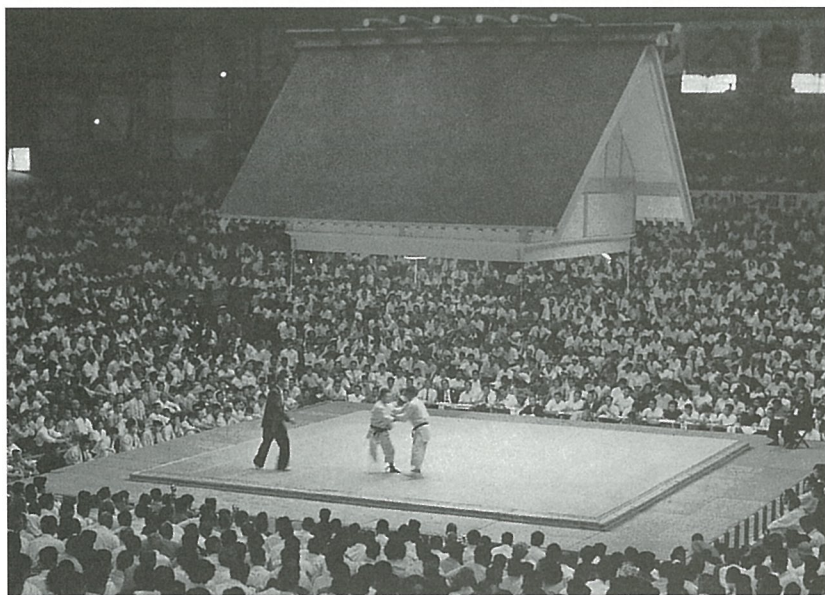
大野忠博 ○	出足弘	相藤 司
河辺一彦	引分	渡辺一雄
山尾英三 ○	内股	中村 治
末木 茂	引分	江崎博正
石橋毅次郎	引分	蔵重守雄
門屋賢伍 ○	十字固	秋吉 彰
曾根康治 ○	大外刈	川口良雄

明大先鋒大野の足払見事に決り先取点、山尾の内股で加点し終始明大ペースで試合終了。

#### 〔決勝戦〕

明治大学 7-0 日本大学

大野忠博 ○	釣込腰	山越
河辺一彦 ○	大内刈	有馬利雄
山尾英三 ○	内股	三井治桂
末木 茂 ○	技有	岩田 武



大観衆が蔵前国技館を埋めつくす第1回大会の盛況

石橋毅次郎 ○	内股	藤根文一郎
門屋賢伍 ○	崩上四方固	東沢 勝
曾根康治 ○	送襟締	女川彌一郎

先鋒大野、準決勝戦に引き続き、鮮かな一本勝ちで明大の意気上がる。以後、完全に明大の流れとなり、圧勝で、記念すべき大会の

金子に続き明大主将の連覇。

〔準決勝〕

曾根康治○ 大外返 末木 茂

(明大)

(明大)

一ノ瀬泰男○ 技 有 東沢 勝

(関大)

(日大)

〔決勝戦〕

曾根康治○ 払巻込 一ノ瀬泰男

(明大)

(関大)

一ノ瀬曾根の体制を崩さんとさかんに引き回すが曾根動ぜず。二分すぎ曾根大外から払巻きに転ずれば一ノ瀬大きく飛んで畳を背負う。覇者の貫禄を示した一本勝ち。

第4回東西学生対抗柔道大会

11月8日 大阪球場

東西学生対抗戦は、昭和十五年に第一回大会が行われている。以後四十三回大会まで続いたが平成三年をもって休止となった。

ここでは、戦後、学連復活最初の大会を記載する。

東 軍 西 軍

優勝は明大曾根

本大会の優勝候補の一人吉田五段（久留米大）は初戦で敗退したが、やはり優勝の呼び声の高かった明大曾根は危な気なく決勝に進み、関大一ノ瀬を何なく下して優勝。前年の



優勝した明大チーム

初優勝を決める。

第4回全日本学生柔道選手権大会

11月9日 大阪球場特設道場

# 闘魂の記録 1952 (昭和27) 年

同	半田 実 (東北大)	○	堀田 浩 (関大)	同	石橋毅一郎 (明大)	○	一ノ瀬泰男 (関大)
同	泰 興三 (早大)	○	同	同	同	○	同
同	同	○	城戸 亮 (和医大)	同	益子政人 (学五工大)	○	同
同	同	○	林田義人 (関大)	同	同	○	野見山利彦 (関大)
同	同	○	前田久光 (鹿商大)	同	同	○	杉山修一 (阪大)
同	同	○	上田 勇 (西南学院)	同	同	○	横山敏明 (鹿商大)
同	岩崎 勇 (明大)	○	藤勝和昭 (関大)	同	樋口貞介 (新潟大)	○	坂部 殷 (大工大)
同	同	*	浜地直壽 (九大)	同	同	*	大溪和雄 (大谷大)
同	中村 治 (中大)	○	同	同	同	○	高谷定弘 (近大)
同	同	○	原田周明 (関大)	同	江崎博正 (中大)	○	本郷光保 (同大)
同	同	○	小林 稠 (関学)	同	同	*	水島 亨 (関山大)
同	同	○	荻野考一 (近大)	同	熊切照男 (慶大)	○	菅沼精一 (京大)
同	同	○	西居司郎 (龍大)	同	同	*	三木庸行 (立命大)
同	同	○	野口洋二郎 (九大)	同	渡辺政雄 (明大)	○	小野山俊一 (京大)
同	同	○	前田 勲 (関学)	同	合川正夫 (愛知大)	*	同
同	渡辺欣嗣 (明大)	○	長 久人 (西博)	同	片桐松薫 (東大)	○	同

同	河辺一彦 (明大)	○	右田昌秀 (九龍大)
同	同	○	石田羊三 (同大)
同	同	○	吉田満博 (久留米医)
同	宮崎 剛 (慶大)	○	同

## 全日本選手権大会出場者

山肩敏美、石橋弥一郎、金子泰興

## 明大の技

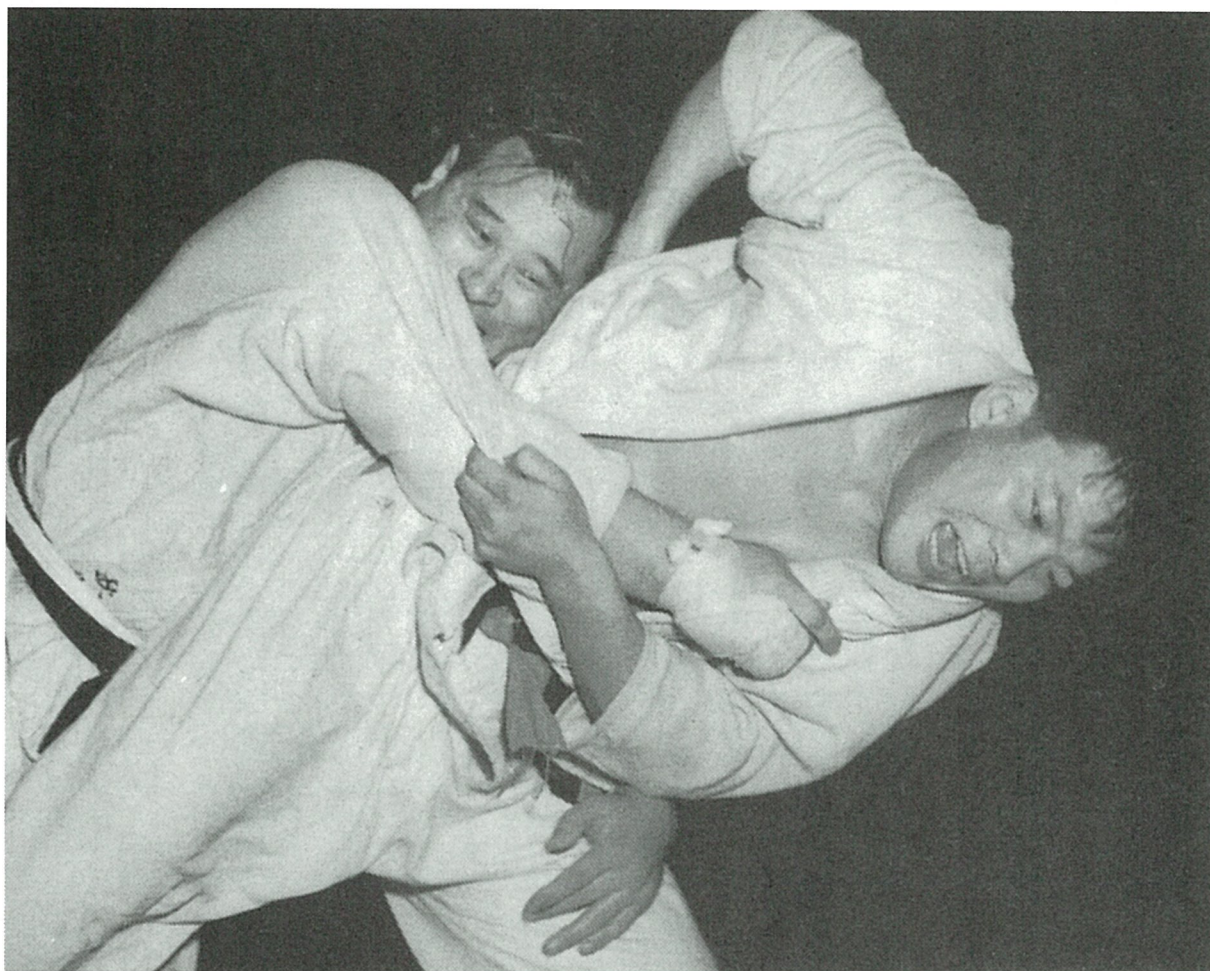
### 曾根康治の内股

曾根といえば大外刈、追いきみながら、右腕で相手の首をまき二段に刈り取るあの大技は、いまだに語り草になっている。また、かつて曾根と稽古をしたことのある者にとっては、恐怖の技でもあったことを思いだすに違いない。何の大会であったか、曾根がこの大外刈で次々と相手を倒していくさまを、「まさに暴虎馮河のいきおい」と評した新聞があった。

おそらく選手生活全勝星の七割はこの大外刈であっている。

しかし、専門家筋では、あの跳腰ぎみにか





足腰のパネ力で豪快に決める曾根の内股

ける内股の評価がむしろ高い。右内股は相手の左内股か真中をはね上げるのが通常であるが、曾根は、飛び込んで相手の右内股をはね上げる通称高内股で、技がきいたときは一ぱつで相手を飛ばした。近年この型の内股をやる人が増えているが、うまいのは見あたらない。瞬発力、とくに足と腰のパネ力を要するこの技は、柔道家らしからぬ引き締まった筋肉と長い手足の持ち主であった曾根ならではのものではあった。昭和三十二（一九五七）年の全日本大会で、優勝候補の巨漢、伊藤七段（武専OB）をこの内股で飛ばしたが、これは日本選手権大会史上にのこる美技とされている。

「天から曾根さんのコメント」

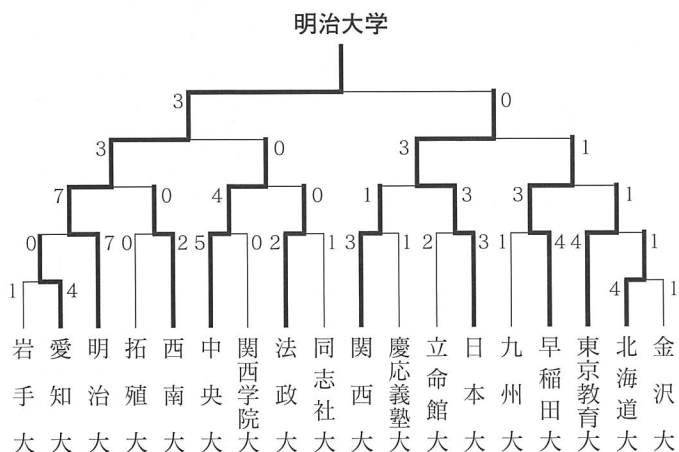
「おれは、ヤツパリ大外だ。相手の背中を刈ってとったこともあるんだぜ！」

## 第2回全日本学生柔道優勝大会

7月5日 蔵前国技館

### 明大連覇!

全学柔道加盟の百余校の中から選抜された優秀校十八校の選手が一人を越える大観衆の声援を浴びて熱戦を展開する中、明治は全試合無失点という離れ技で連覇を遂げた。



### 〔準決勝〕

日本大学 3-1 早稲田大学  
 明治大学 3-0 中央大学

明大先鋒渡辺(政)は先手をとって積極的に攻め大内刈で追い込み内股に変化すれば鮮やかに決まる。河辺は大内刈で技有をとり、かさず横四方で固めたのはすきのない攻めだった。

### 〔決勝戦〕

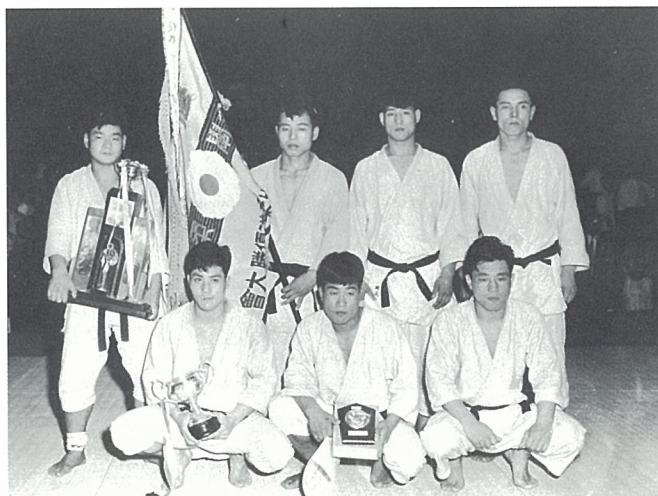
明治大学 3-0 日本大学

渡辺政雄○	体落	川内信哉
渡辺欣嗣	引分	斉藤幹郎
中野竜登	引分	磯川甚一
山尾英三○	返技	三井浩柱
石橋毅次郎	引分	石田昭二
河辺一彦	引分	藤根文二郎
末木 茂○	大外刈	女川彌一郎

渡辺(政)は素早く勝ち決め、先鋒の大任を見事に果す。山尾相手の大外をきれいに返し流れは明大に、大将末木は立上がりざまに大外刈を強襲して順当に優勝を決めた。

### 優秀選手

明治大学 河辺一彦  
 日本大学 藤根文二郎  
 関西大学 堀田浩  
 早稲田大学 石井勇  
 西南大学 上村正



連覇の明大チーム

## 第4回全日本学生柔道選手権大会

11月15日 大阪府立体育館

栄冠は明大の末木に

〔準決勝〕

渡辺政雄○ 体落 川島卯太郎  
(明大) (日医大)

渡辺三回戦で痛めた足首の負傷にもめげず  
巨漢の川島をなんなく体落で決める。

末木 茂○ 体落 渡辺貞三  
(明大) (法大)

両者ゆずらず互角の内容で終盤に入る。時  
間切れ寸前、末木渾身の大外刈を放てば鮮か  
に決まる、執念の一本勝ち。

〔決勝戦〕

末木 茂○ 体落 渡辺政雄  
(明大) (明大)

今大会も明大勢は強く決勝は明大同士の対  
決となった。末木は準決勝戦のつかれをみせ  
ず渡辺の動きをとらえ得意の大外落しぎみの

体落を力一杯きめ優勝。

全日本選手権大会出場者

石橋弥一郎、山肩敏美、伊藤信夫



昭和28年全日本学生選手権大会決勝戦 末木茂(明大)大外落渡辺政雄(明大)

## 第3回全日本学生柔道優勝大会

7月4日 東京体育館

### 明大三連覇!

会場を国技館から東京体育館に移して行われた本大会の気は高く、一万二千を数える大観衆を前に明治は輝く三連覇を果した。

#### 〔準決勝〕

明治大学 4-0 天理短期大学

岩崎 勇○ 優勢勝 清川紫洋

河辺一彦 引分 井上正信

渡辺欣嗣○ 移腰 杉尾春彦

中野竜登 引分 今村春夫

石橋毅次郎○ 小内刈 脇田晴己

山尾英三○ 返技 古賀正紀

日本大学 3-0 早稲田大学

#### 〔決勝戦〕

明治大学 5-0 日本大学

岩崎 勇○ 内股 斉藤修孝



三連覇の明大チーム

河辺一彦 引分 加辺良美  
 渡辺欣嗣○ 合せ技 松下三郎  
 中野竜登○ 優勢勝 岡本光弘  
 石橋毅次郎○ 優勢勝 三井治桂  
 山尾英三○ 内股 石田昭二

かくして明治は輝く三連覇を遂げた。

優秀選手 明治大学 山尾英三  
 渡辺欣嗣  
 渡辺政雄

天理大学 今村春夫  
 九州大学 野口洋次

## 第6回全日本学生柔道選手権大会

11月14日 大阪府立体育館

### 石橋優勝、明大勢四連覇!

戦後学生柔道復活の第一回目の大会となった第三回学生柔道選手権大会で金子が勝つて以来、昭和二十六(一九五二)年の明治の選手が勝ち続けている本大会で今年もまた石橋が優勝、まさに明治勢止まるところを知らずの観である。

#### 〔準決勝〕

石橋毅次郎○ 優勢勝 河辺一彦  
(明大) (明大)

最初石橋の内股に河辺が大きく飛ぶが場外、その後、石橋内股、跳腰とポイントを取るが、河辺も足払いから釣込腰とよく闘う。共に変化激しい見ごたえのある試合であったがポイントの内容で石橋に軍配が上る。

益子政人○ 優勢勝 石田昭二  
(東学大) (日大)

〔決勝戦〕

石橋毅次郎 ○ 内股 益子政人

(明大)

(東学大)

下馬評では山尾、石橋の明大同門対決を予想されていたが、益子強豪を倒して決勝進出を果たす。

石橋先手を取り、益子の技を封じ大きく左へ崩して回り込むように思い切って内股に入れば益子宙に舞って鮮かな一本。時間わずかに一分二十秒、ここに石橋の優勝が決定した。

全日本選手権大会出場者

山肩敏美、石橋弥一郎、曾根康治、石橋

毅次郎

### 明大の技 渡辺政雄の大内刈

「いくらなげられても気分？ がよかった」  
「稽古をしていて爽快感をおぼえる柔道だった」  
渡辺政雄を知る人は、彼の柔道をこのようにいう。世の中に強いといわれる人は結構いるものだが、相手に爽快感を感じさせられるような稽古の出来る人はそうはいない。渡

辺政雄は、足技の講道館といわれた良き時代の講道館少年部の出身であり、足技、特に大内刈を軸とした流れるような連続技は伝統のサンプルを見る思いだった。

大内刈から体落し、内股。釣込足から大外刈、体落しから大内刈、内股の連絡等、理づめな作りと加速度的にスピードがのってくる連続技は、むしろ華麗でさえあった。もちろんこうした攻めは正しい姿勢と無駄のない体さばきから生まれるものであり、どんな相手とでも、スキツとした姿勢で稽古していた様子が彷彿する。渡辺の柔道のもう一つの特徴

は、相手の体格、体勢のいかんを問わず、自分の技が出たということである。相当に強力な技の持主でも、きまった自分の組み手にならなければ技が仕かけられない者が多い近ごろの柔道であるが、彼の場合、大内刈の例でいえば、右自然体からの他、組みぎわの攻め、両そでをとつての攻め、等どこをにぎっても相手を崩すことが出来た。姿勢の悪い相手ほど技がきいた、といっている。



渡辺政雄の大内刈が決まる

## 岩崎勇の内股

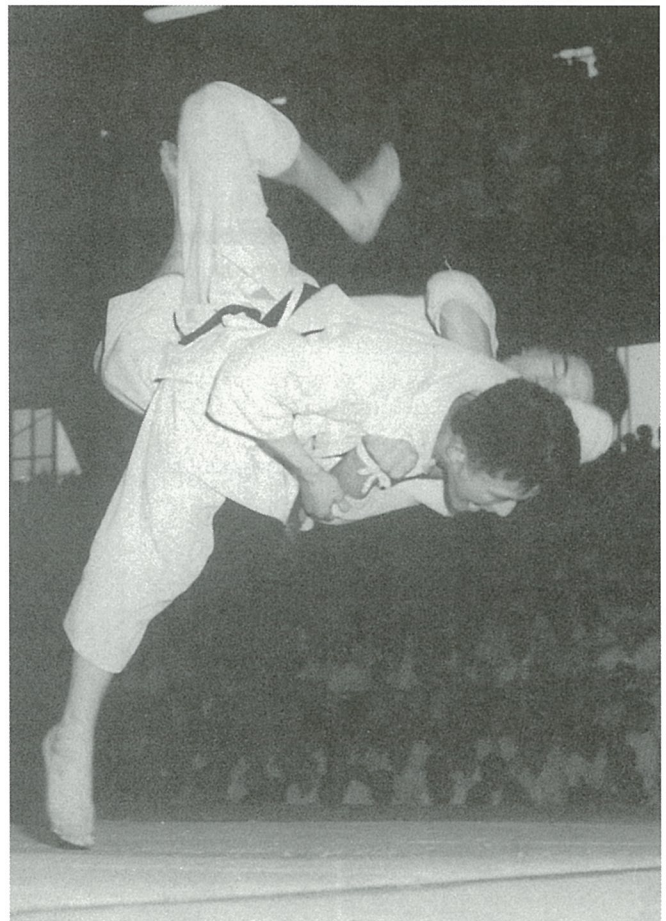
明大付属中野高校柔道部を指導している工藤欣一（昭和二十九年年度）は、技の指導説明にあたって、その技を得意とした往年の明大のスター達をモデルとして登場させた。すなわち、背負投であれば徳山操、須磨周司、大外刈ならば村井正芳、の引きつけであり、重松義成の刈りという具合である。

そこでこの工藤教室、内股の部に一番多く登場するのが岩崎勇（二十九年年度）である。明大の内股を代表する名手には、この岩崎の他に、曾根康治、石橋毅次郎、徳永三幸、富田弘美、安斉泰人、等が上げられる。

岩崎は現役時代の主な試合で六十勝しているが、このうちの五十六勝が内股による一本か又は技有りということである。彼が内股の職人といわれる所以である。

岩崎は相手が大きかろうが、小さかろうが、業師であろうが、自護体であろうが、ひたすら内股でとる、業師である。

といって彼は大兵強力の士ではなく、身長一七五cm、体重は学生時代で七五kg 全日本選手権で活躍した現役後半期でも八〇kgに達したことはない。今でいう中量級の左内股で



オーソドックススタイルの岩崎勇の内股

あるから、その組み方にも、崩しにも彼ならではのものが当然ある訳だが、一番の持味は、その引き手にあつたと思われる。相手の袖口に近い部分を腕がゆるまないように絞つてとり、自分の右腰に引きつけるように、体をさばく。技を施す瞬間は、相手の手首が自分の右腰に固着された型にする。そして俊敏な体のひらきと腰のひねりで飛ばす。

この型は引き手を袖口近くをにぎった時の極くオーソドックスなスタイルであるが、岩

崎はこれを完全に自分のものとしていた。特に腕力に恵まれてはいなかったが、試合においてめつたに組み分けることなく、この持ち手になると間髪を入れずに攻めまくり、内股を予期している相手を内股で飛ばした。

## 渡辺欣嗣の内股

昭和二十九年、全日本学生柔道優勝大会、日大との決勝戦。

新聞の見出し風に表現するならば、

「渡辺（欣）選手の必殺の背負に、松下、宙に舞う」とでもなるだろうか？

当時松下選手は新入生ながら、その実力は高く評価され、天理の古賀と共に、我々も一目おいていた。無敗の明大柔道部にとっても、彼は脅威の存在であり、新入生に不覚をとってはと胸中おだやかでは無かった。松下と対戦した欣嗣の胸中も、全く同じ気持ちだったに違いない。

然し、その不安は、欣嗣が試合場に入った瞬間吹き飛んだ。審判の「始め」の声を聞くと、闘志満々、左やや半身に構えて、松下を下から睨みつけ、二度までも、宙に舞わせたのである。（技がきまりすぎて半身で落ちた為、合せ技となった）この試合は、見る者をしてさすが明大柔道部と、その名声をいやが上にも高め、我々も大いに面目を施した。

その背負投もさることながら、これが欣嗣の技と言えるのは、引手を持った瞬間、相手の懐に飛び込んだの「左跳巻込み」こそ第一

技と考える。（決まり技は「内股」になっているが、技の仕掛けは、跳腰）これは、彼独特の技で、誰も真似出来ない特技ではないだろうか？ 昭和二十七年学生東西対抗に於いて六人抜きの記事は、今でも破られていないが、その時の決まり技は、五人までが跳巻込みであったと記憶する。

彼の代表技は、いずれも、見事な切れ味だった。その切れ味は、稽古によって研かれた事を付記しておきたい。

## 明大が三年連続優勝

### 第二回全日本学生柔道

雲南全日本学生柔道優勝大会は、八日地区の代表工役が参加して四月十日から早稲谷東京都体育館で挙行された。昨年の優勝校である明大も、この大会で、二回戦を勝利して進出し、三回戦で、一方日大早大を破り、四回戦で、日大の地で争われ、決勝戦も明大は日大の負い目をも退け、歴史的な試合運びを見せ、最善の優勝を挙げた。

試合終了後、選手として山尾敬欣、渡辺欣、白上明之、今野等が活躍した。

村岡健之、野口（中）の五強が影響された。

回	対戦相手	結果
一回戦	明大 7-0 (非得意)	勝
二回戦	明大 3-1 (千原大)	勝
三回戦	明大 6-0 (新田大)	勝
四回戦	明大 2-2 (東大)	勝
五回戦	明大 7-0 (西大)	勝
六回戦	明大 5-0 (東大)	勝
七回戦	明大 2-1 (日大)	勝
八回戦	明大 5-0 (東大)	勝
九回戦	明大 6-0 (天理大)	勝
決勝	明大 6-0 (天理大)	優勝

開学生スリダク、リーグの最終日明大対日大、日大対天理の二試合は四月午後一時を青山レスリング会館で行われ、明大がそれぞれ勝った。この第一試合は明大、腰、中々の力が同じく勝点三となり、勝者は、明大の優勝となった。

○ 飯塚 定久保  
○ B 飯塚 定久保  
○ F 飯塚 定久保  
○ 飯塚 定久保

明大が優勝



渡辺欣嗣の必殺の内股を報じる記事

第4回全日本学生柔道優勝大会

7月3日 蔵前国技館

明治四連覇を逸す

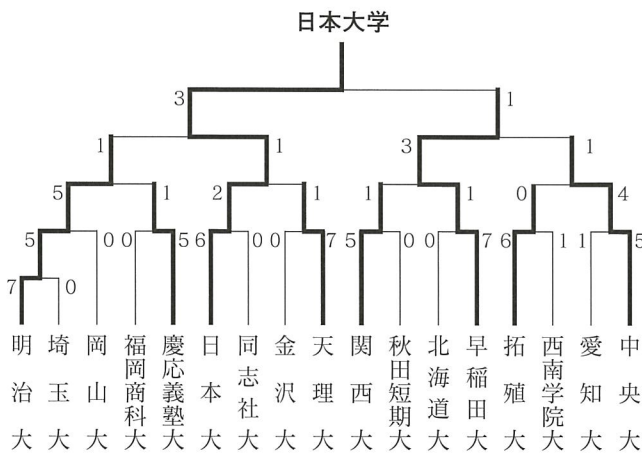
明治は準決勝戦、同点の内容負けで四連覇を逸したが、大将戦の石橋対斉藤戦は現在の審判規定では石橋の総合勝ち一本であろう。主審の判断が絶対的であった当時のことであるからやむを得まいが、本大会を後援している毎日新聞をはじめ各紙がこの判定を疑問視したという事実は残った。

〔準決勝〕

早稲田大学	3-1	中央大学
日本大学	1-1	明治大学

加辺良美○	大外巻込	徳山 操
田島英介	引分	比嘉良幸
木村忠雄	引分	長田万蔵
江藤公明	引分	神永昭夫
松下三郎	引分	徳永三幸
三井治桂	優勢勝	○中野竜登
斉藤幹郎	引分	石橋毅次郎



一対一で大将戦となる。明大石橋、果然と積極攻勢に出て内股を連発、斉藤石橋の強襲をのがれようとしれば場外に出る。石橋の内股は二度、三度と決まったか見えながら判定は場外、斉藤は守勢一方で反撃のないまま時間となる。主審菊地氏と副審伊藤氏の異例とも思われる長い協議の結果判定は斉藤へ。

〔決勝戦〕

日本大学 3-1 早稲田大学

優秀選手 明治大学 石橋毅次郎

中央大学 渡辺喜三郎

日本大学 加辺良美

天理大学 古賀正躬

早稲田大学 三宅倫三

第7回全日本学生柔道選手権大会

11月13日 大阪府立体育館

〔準決勝〕

石橋毅次郎○ 優勢勝 米田圭介

(明大) (天理大)

松下三郎○ 抽選勝 斉藤幹郎

(日大) (日大)

〔決勝戦〕

松下三郎○ 払巻込 石橋毅次郎

(日大) (明大)

全日本選手権大会出場者

大野忠博、渡辺政雄、河辺一彦、石橋毅次郎、金子泰興、曾根康治、山肩敏美、山尾英三、石橋弥一郎